本庄市遺跡調査会報告　第6集

大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区（第2次）・北堀前山古墳群（第2・3次）発掘調査報告書

―新幹線本庄新駅（仮称）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査Ⅰ―

平成14年
埼玉県本庄市遺跡調査会

大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区（第２次）・北堀前山古墳群（第２・３次）発掘調査報告書

－新幹線本庄新駅（仮称）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査Ⅰ－

平成14年
埼玉県本庄市遺跡調査会

序　文

本庄市の南端には、市域唯一の丘陵である深い緑におおわれた大久保山があります。今回調査をしました２つの遺跡は、大久保山の丘陵の枝分かれした尾根の北端、北側に広がる水田を眼下に見下すような位置にあります。

丘陵とそれを取り巻く一帯は、今回報告する大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区、北堀前山古墳群をはじめとして、久卿塚古墳および周辺の諸古墳、宥勝寺北裏埴輪窯跡、久下東遺跡や久下前遺跡などの集落跡、あるいは南の大久保山寺院跡と、幅広い時代にわたる重要な遺跡が格別密集する一帯です。

現在、本庄市は平成16年新幹線本庄新駅（仮称）の開業に向けて全市をあげて尽力しております。今回の調査は、新幹線新駅建設に必要な周辺整備事業にともない実施しました。新幹線新駅の建設は、公益性の高い事業であるとともに、その建設は緊急性の高い事業でもあることから、事前の記録保存のための調査を実施した次第です。

本書に示すように、今回の調査は、大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区の第２次調査、北堀前山古墳群の第２・３次調査にあたります。

浅見山Ⅰ地区の調査は、道路改良事業にともなう小範囲の調査でしたが、早稲田大学がこれまでに確認しておりました古墳時代の墳墓の一端をとらえることができました。北堀前山古墳群の調査では、発掘調査による情報が一切なかった北堀前山１号墳に関連すると思われる遺構の一部を確認し、また、北堀前山２号墳の墳形についての重要な知見を得ることができました。

この報告書が、埋蔵文化財についての理解と郷土の歴史についての関心をより一層深めるための資料として、多くの方々に活用していただければ幸いに存じます。

末筆ながら、発掘調査、報告書作成にあたって、多大なご協力を賜った関係諸機関並びに各位に対し、心から御礼申し上げる次第です。

平成14年３月

本庄市遺跡調査会

会長　福　島　　巌

例　言

1．本書は、埼玉県本庄市大字東富田字山根88に所在する大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区の第２次調査および同本庄市大字北堀字前山2081－１に所在する北堀前山古墳群の第２・３次調査の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。北堀前山古墳群（本庄186号遺跡）は、これまで「前山古墳群」と呼称され、またその名称で報告もなされてきた経緯があるが、今回の報告をもって遺跡名の変更をおこなう。同様に従来同古墳群内の「前山１号墳」、「前山２号墳」とした古墳名を、「北堀前山１号墳」、「北堀前山２号墳」に変更する。

2．発掘調査は、上越新幹線本庄新駅（仮称）建設にともなう道路改良工事および軌道敷設関連工事に先立ち、本庄市遺跡調査会（会長　福島　巌）、本庄市教育委員会が実施したものである。

3．発掘調査を実施した期間は、大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区の第２次調査が平成13年４月３日から同年４月23日までである。北堀前山古墳群に関しては、試掘調査を平成12年１月12日から同年２月10日までおこなった。第２次調査は、平成12年10月23日から同年11月24日まで、第３次調査は、平成13年４月11日から同年４月19日までの期間に実施した。なお、北堀前山古墳群の第３次調査は、北堀前山２号墳の周溝確認を目的とした試掘調査である。

4．整理作業は、本庄市遺跡調査会が調査終了後漸次おこなったが、とくに平成14年１月以降、図版作成、原稿執筆、編集等の作業を集中しておこなった。

6．発掘調査に関しては、増田一裕・太田博之・松本　完が担当した。

7．発掘調査に必要な基準点測量および水準測量に関しては、昭和株式会社に委託した。基準点測量に用いた座標系は、第Ⅸ系座標系である。

8．大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区に関しては、隣接する調査区検出・確認遺構全体図、北堀前山古墳群に関しては、古墳群をとおる切り通し部分の工事の際の略測図など諸資料を、調査前に早稲田大学本庄考古資料館より拝借し、調査時の参考資料、検討材料とした。また、調査後になるが、埼玉県埋蔵文化財センターの保管する、北堀前山２号墳の第１次調査時の現地作成図面、写真を複写させていただき、検討をくわえることができた。

9．本書の執筆は、「Ⅰ．調査にいたる経緯」を本庄市遺跡調査会事務局が、その他を松本がおこない、編集は松本・町田奈緒子がおこなった。

10．挿図中の第１図は１／25,000地形図『本庄』（1995年、国土地理院発行）、第２図は１／2,500地形図（1989年、パスコ測量）にもとづき加除筆したものである。

11．第３図の大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区丘陵北東部遺構分布図は、早稲田大学本庄考古資料館より提供していただいた遺構全体図の一部に加除筆し、今回の調査範囲を加え浄書したものである。また、第７図の北堀前山古墳群（第１～３次調査）遺構全体図でもちいた第１次調査の遺構全体図は、埼玉県教育委員会が発行した報告書（小久保・柿沼ほか　1979）所載の挿図の一部に加除筆したのち浄書・転載した。

12．第３図の大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区丘陵北東部遺構分布図で、網かけ部分は、早稲田大学が確認した方形周溝墓をあらわし、第４図の大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区（第２次）遺構全体図、第８図の北堀前山古墳群（第２次）遺構全体図で、網かけ部分は、未調査範囲あるいは撹乱をあらわしている。

13．土層および遺物についての色調表現は、『新編標準土色帳』によった。

14．発掘調査および出土資料の整理、報告書作成にあたって、ご協力頂いた作業員の方々は、下記の

とおりである。ここにしるして感謝の意をあらわす次第である（敬称略、五十音順）。

相田千代子、赤祖父瑞香、飯島嘉蔵、池田一彦、伊藤好雄、上田ニラモル、岡野　敬、奥野節子、小野　喬、金井一郎、金井梧郎、金本みどり、門倉澄子、河田倫子、木島　覚、木島麻子、木村タツ、久保田かづ子、古指　茂、小暮悠樹、近藤美雪、斉藤真理子、塩原忠治、塩原晴幸、関根典子、高田和正、高橋辰馬、滝沢美知子、福島清治、八木道良、柳川恵美子、山崎和子、吉田真由美

15. 発掘調査および報告書の作成にあたっては、下記の方々および諸機関にご教示、ご協力を賜わった。末筆ながらしるし、感謝の意をあらわす次第である（敬称略、五十音順）。

荒川正夫、江原昌俊、大谷　徹、大熊季広、柿沼幹夫、金子一郎、金子彰男、賀来孝代、加部二生、恋河内昭彦、昆　彰生、坂本和俊、佐々木幹雄、島田孝雄、志村　哲、鈴木徳雄、外尾常人、瀧瀬芳之、田村誠、塚田良道、塚脇美緒、徳山寿樹、鳥羽政之、長井正欣、長瀧歳康、中里正憲、中沢良一、日高　慎、松澤浩一、丸山　修、村田健二、矢内　勲、横澤真一

群馬県古墳時代研究会　埼玉県埋蔵文化財センター　埼玉県埋蔵文化財調査事業団　早稲田大学本庄考古資料館

目　次

序　　文 …… i
例　　言 …… iii
目　　次 …… v
挿図目次 …… vi
図版目次 …… vi
Ⅰ　調査にいたる経緯 …… 1
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 2
　1　遺跡の立地 …… 2
　2　周辺の遺跡と歴史的環境 …… 3
Ⅲ　調査の方法と経過 …… 5
　1　調査の方法 …… 5
　2　調査の経過 …… 5
Ⅳ　大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区の遺構と遺物 …… 7
　1　層序 …… 7
　2　古墳時代の遺構 …… 7
　　(1)　1号遺構 …… 7
　3　遺構外出土遺物 …… 10
Ⅴ　北堀前山古墳群の遺構と遺物 …… 11
　1　層序 …… 11
　2　古墳時代の遺構と遺物 …… 11
　　(1)　2号墳 …… 11
　　(2)　1号墳関連遺構 …… 15
　3　その他の遺構と遺物 …… 17
　　(1)　1号溝 …… 17
Ⅵ　まとめ …… 18
引用文献および主要参考文献 …… 20
図版

挿図目次

第１図　周辺の主要遺跡分布図 …… 2
第２図　大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区・北堀前山古墳群位置図 …… 4
第３図　大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区丘陵北東部遺構分布図 …… 8
第４図　大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区（第２次）遺構全体図 …… 9
第５図　１号遺構平面図および断面図 …… 9
第６図　遺構外出土土器実測図 …… 10
第７図　北堀前山古墳群（第１～３次）遺構全体図 …… 12
第８図　北堀前山古墳群（第２次）遺構全体図（1） …… 13
第９図　北堀前山古墳群（第２次）遺構全体図（2） …… 14
第10図　２号墳平面図および断面図（1） …… 14
第11図　２号墳平面図および断面図（2） …… 15
第12図　北堀前山古墳群（第３次）遺構全体図 …… 16
第13図　２号墳出土土器実測図 …… 16
第14図　１号溝出土土器実測図 …… 17

図版目次

図版１　大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区近景（南東より）、１号遺構土層断面（1）（調査区界南東露頭、東より）、大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区全景（西より）
図版２　１号遺構（東より）、１号遺構土層断面（2）（東より）、１号遺構土層断面（3）（西より）
図版３　北堀前山古墳群遠景（北東より）、第２次調査範囲全景（1）（北西より）、第２次調査範囲全景（2）（北西より）
図版４　２号墳周溝（1）（北西より）、２号墳周溝（2）（北西より）
図版５　２号墳周溝（3）（南東より）、２号墳周溝（4）（南東より）、２号墳周溝南西コーナー（南東より）
図版６　２号墳周溝内土坑１（北東より）、２号墳周溝内土坑２（北東より）、北東壁土層断面（1）（a－a´、南西より）、北東壁土層断面（2）（a－a´、南西より）、南東壁土層断面（b－b´、北西より）
図版７　１号墳関連遺構（1）（北西より）、１号墳関連遺構（2）（北西より）、１号墳関連遺構（3）（東より）
図版８　第３次調査範囲全景（1）（東より）、第３次調査範囲全景（2）（南より）、２号墳周溝確認状況（南より）

Ⅰ　調査にいたる経緯

本庄市は埼玉の「北の玄関口」と呼称されるように、県北西部に位置する。この地域は、古代より上野国側との密接な地理的環境にあった。近世に入ると、中山道本庄宿として繁栄し、周辺の交通拠点となった。こうした地の利を活かし、現在では拠点法の指定を受け、各種事業が進展しつつある。上越新幹線本庄新駅（仮称）建設事業（以下、本庄新駅）も、その一環として計画された。

本庄新駅建設予定地周辺に埋蔵文化財が集中することは、計画段階より周知であった。このため、平成11年４月12日付け本拠発第２号で当該事業に伴う『埋蔵文化財の取扱いについて』の協議書が、本庄市長より本庄市教育委員会教育長宛に提出されている。

これに対し、平成11年４月19日付け本教社第23号で『新幹線本庄新駅（仮称）建設地内にかかる埋蔵文化財の取扱いについて』を本庄市教育委員会教育長より本庄市長宛に回答した。その後、埼玉県教育委員会の指導を受けて範囲確認調査と協議が開始された。

一方、上記とは別に、平成13年２月21日付本拠発第91号で、新幹線本庄新駅（仮称）の開発に関連する『埋蔵文化財の所在について』の照会文書が、本庄市拠点整備推進局より本庄市教育委員会に提出された。その理由は、当該工事に伴い、南方に立地する早稲田大学本庄高等学院に通じる道路が遮断されるため、機能補償にかかる道路建設の必要性が生じたことによる。当該事業地内には大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区が所在しているため、文化財保護法に基づき諸手続きをとるよう平成13年３月１日付け本教社第251号で回答した。しかし、その後の協議の結果、現状保存は困難であることから発掘調査を実施することとなった。

これに伴い、平成13年３月30日付け本拠発第106号で本庄市長より本庄市遺跡調査会会長宛で『埋蔵文化財の発掘調査について』の依頼書が提出された。このため、現地発掘調査は本庄市教育委員会の指導のもと、本庄市遺跡調査会が行うこととなった。

発掘調査にかかる手続きは、平成13年４月２日付け本教社第２号で『埋蔵文化財発掘調査の通知』を本庄市教育委員会教育長より埼玉県教育委員会教育長宛に提出し、また、事業者である本庄市長からは、平成13年３月29日付本拠発第101号で埼玉県教育委員会教育長宛に提出された。なお、これには『埋蔵文化財発掘調査の通知の取扱いについて（副申）』を添付し、発掘調査による記録保存の必要性を助言した。

上記に対し、平成13年４月16日付け教文第３－20号で、埼玉県教育委員会教育長より本庄市教育委員会教育長宛で『周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について』の通知文書が届き、その趣旨をふまえて記録保存措置が講じられることとなった。

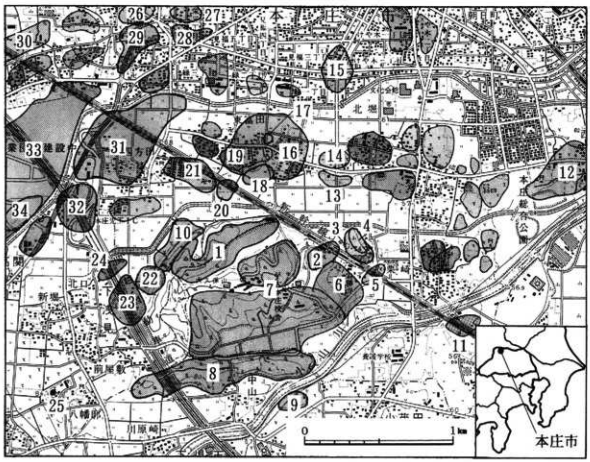
なお、本庄新駅建設に伴う発掘調査として北堀前山１・２号墳が該当したため、事前に発掘調査を実施することとなり、『埋蔵文化財発掘調査の通知』を平成12年10月20日付け本教社発第152号で提出した。同時に原因者からは、平成12年10月20日付け本拠発第34号で埼玉県教育委員会教育長宛に提出された。対する回答文書は、平成12年11月24日付け教文第３－548号で『周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について』が、埼玉県教育委員会教育長より本庄市教育委員会教育長宛に届いた。

（本庄市教育委員会事務局）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　遺跡の立地

大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区（以下、本文中では「浅見山Ⅰ地区」と略称する）と北堀前山古墳群は、本庄市のほぼ中央南縁に近い位置にある（第１・２図）。本庄市は、東西に長い埼玉県の北西端、利根川をはさんで群馬県伊勢崎市と境を接し、北関東の南端ともよびうる位置を占める。この地理的位置ゆえに、古代あるいはそれ以前より北関東と共通した様々な要素を文物にみることができ、また現在なお地理的環境、気候、風土の点で、群馬県域との強いむすびつきがみとめられる。



1．大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区　2．北堀前山古墳群　3．北堀前山遺跡　4．宥勝寺北裏埴輪窯跡　5．東谷遺跡　6．大久保山寺院跡　7．大久保山遺跡　8．塚本山古墳群　9．村後遺跡　10．山根遺跡　11．古川端遺跡　12．西五十子古墳群　13．久下前遺跡　14．久下東遺跡　15．笠ヶ谷戸遺跡　16．東富田遺跡群　17．公卿塚古墳　18．七色塚遺跡　19．元富遺跡　20．下田遺跡　21．観音塚遺跡　22．根田遺跡　23．雷電下遺跡　24．飯玉東遺跡　25．鷲山古墳　26．夏目遺跡　27．薬師遺跡　28．薬師元屋舗遺跡　29．社具路遺跡　30．今井源訪遺跡　31．女堀条里遺跡、四方田・九反田遺跡　32．後張遺跡　33．今井条里遺跡　34．今井川越田遺跡

第１図　周辺の主要遺跡分布図

本庄市の地形は、利根川右岸の低地と市街地化の中心をなす台地および市域南端の丘陵の3つにわけられる。低地は、利根川や烏川の氾濫原で、下流にひろがる妻沼低地、加須低地へとつらなる。台地は、いわゆる北武蔵台地の最北の本庄台地で、主に神流川扇状地と身馴川扇状地からなる複合扇状地性の台地である。神流川扇状地は、群馬県鬼石町浄法寺付近を扇の要とし、扇の端は本庄段丘崖を形づくっている。身馴川扇状地は、北西側を児玉丘陵に、南東側を松久丘陵、獅引台地によりはさまれた一帯である。市域唯一の丘陵地形が、大久保山（浅見山丘陵）である。

四周に目を移すと、南の上武山地の山々から、妙義、浅間、榛名、北の赤城、男体などの諸峰とそれにつらなる山々が三方をとりまく光景が遠望できる。上武山地は、関東山地の北西につらなる山並みである。その北東部は上記した児玉丘陵、松久丘陵へとなだらかに移行する。児玉丘陵はさらに北東へとのび、生野山、大久保山の2つの残丘をのこし平地へと転ずる。

第三系の残丘性丘陵である大久保山は、中央の主丘とそこから枝わかれした2つの支丘からなる。浅見山Ⅰ地区と北堀前山古墳群は、そうした孤島のような大久保山の主丘、支丘の一角にそれぞれ立地する。なお、丘陵の3つの尾根が異なった呼称をもつとする見方もあるが、丘陵全体を、西富田では「大久保山」、栗崎側からは「前山」、美里町側からは「塚本山」、児玉町では「浅見山」と慣習的に呼びならわしてもいるようである。

上に略説した地形の中で、まず浅見山Ⅰ地区は、大久保山の北支丘の北東端に、北堀前山古墳群は、中央主丘の北東端からわずかに奥まったところに位置する。いずれにせよ、2つの遺跡は、北側にひろがる沖積地や微高地を眼下に見おろせる場所、北側からは丘陵を見あげた場合もっとも目立つ位置に立地することに注意したい。

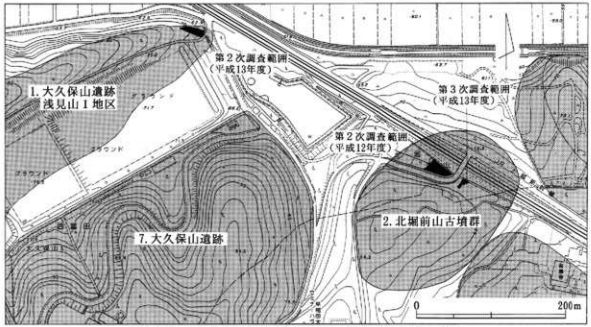
2　周辺の遺跡と歴史的環境

本庄台地の南半、とくに浅見山Ⅰ地区と北堀前山古墳群周辺の主要な遺跡にかぎって、ごく簡単にふれることにする。

縄文時代以降の遺跡について、まず本庄台地では、本庄段丘崖の周辺、すなわち扇状地性の本庄台地扇端一帯には、縄文～弥生時代の遺跡がきわめて少なく、遺構も現状では皆無に等しい。縄文～弥生時代の遺跡、とくに集落址を見出すためには、さらに台地の内奥へとわけ入る必要がある。おそらく森林や中・小河川や支谷のこまかな地形の機微が、集落立地の選択に強く影響したからであろう。縄文時代にあっては森林資源の分布や河川周辺の動植物相、弥生時代以降では、くわえて水稲耕作や畑作の適地、人々の移入経路、交通経路などの様々の要素が複雑にからみあい、集落分布の特徴的なあり方をうみだしたと考えられる。

一方、浅見山Ⅰ地区、北堀前山古墳群のある大久保山周辺、丘陵をとりまく一帯には、弥生時代以降、散漫ながら集落がいとなまれ、この傾向は、古墳時代前期以降にもひきつがれる。

浅見山Ⅰ地区、北堀前山古墳群の周辺について、とくに古墳時代前期前後の時期の主要な遺跡をみてみよう。[注(1)]



第２図　大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区・北堀前山古墳群位置図

周辺の弥生時代遺跡としては、北堀前山遺跡（第１図３、以下（　）内の番号は、第１・２図の番号と同じ）、宥勝寺北裏遺跡（4）、大久保山遺跡（7）、村後遺跡（9）、山根遺跡（10）、根田遺跡（22）、雷電下遺跡（23）、飯玉東遺跡（24）と主な遺跡にかぎっても、弥生時代以降、丘陵部をめぐって遺跡数が急増する傾向をしめす（恋河内　2002）。この傾向は、とくに弥生時代後期以降さらに顕著になるが、古墳時代前期以降は、沖積地に近接した一帯への新たな展開がみられるようである。

周辺の古墳時代前期の集落址としては、まず、浅見山地区（1）の北側に近接して、七色塚遺跡（18）、下田遺跡（20）があり、北堀前山古墳群（2）の北側やはり至近の微高地上には、久下前遺跡（13）、久下東遺跡（14）がある。これらの集落址は、古墳時代中期にも継続する可能性をふくみ、中期以降には、それらの遺跡にさらに東谷遺跡（5）、古川端遺跡（11）、笠ヶ谷戸遺跡（15）などの集落址がくわわる。中期以降かってない集落の隆盛をみるのは、後張遺跡（32）を典型とする女堀川のより上流である。

問題となるのは、古墳時代前期以降の墓域である。今回の調査では、時期を特定できる資料を欠くが、浅見山Ⅰ地区は前期の方形周溝墓とされ、北堀前山２号墳は前期末以降と考えてよいであろう。周辺で、古墳時代前期にさかのぼる墓域は、塚本山古墳群（8）の一部、より上流域になるが、飯玉東遺跡（24）、今井諏訪遺跡（30）の方形周溝墓群をあげることができる。形態的には、いずれも方形周溝墓あるいは方墳であり、また全体としてはかなり狭い範囲に各々分散して墓域が形成されたかにみえること、それぞれ近接して規模のそれほど大きくない同時期の集落址を擁することなど、今後検討すべき課題も多い。

以上瞥見したように、集落址の分布する低位段丘あるいは微高地を、沖積地をはさみ眼下に見おろす丘陵上に位置するのが、今回調査をおこなった浅見山Ⅰ地区、北堀前山古墳群である。集落それぞれの展開過程と墓域の形成、集落と墓域の対応関係については、今後の研究の進展をまつことにしたい。

註

(1)　以下、個別に明記しないが、遺跡の内容については、それぞれの報告書（引用文献および主要参考文献参照）、『本庄市史』（本庄市史編集室編　1976・1986）によった。なお、第１・２図は遺跡分布の概略図であり、東富田遺跡群などのように、細かく地点のわかれる遺跡をひとまとめにしており、また古墳群に関してはおおよその範囲をしめすにとどまる。

Ⅲ　調査の方法と経過

1　調査の方法

浅見山Ⅰ地区と北堀前山古墳群では、遺跡の立地および残存状態が異なるため多少調査方法をかえた部分がある。ここでは、まず調査方法の基本線をしめし、異なった点については適宜説明をくわえることにしたい（第3・7図）。

遺構確認面まで表土をのぞいたが、浅見山Ⅰ地区では、傾斜がいちじるしく遺構の分布が予想される範囲がかぎられるため、小型重機により表土を除去し、北堀前山古墳群では、後述する北堀前山１号墳に関連する黒褐色土が現地表下のかなり浅いところで確認できることが試掘調査の結果からわかっていたため、セクションベルトを適宜のこし全面手掘りで表土を除去した。表土剥ぎの後、業者に委託し測量用の基準杭を打つとともに、等高線図を作成した。北堀前山古墳群の第３次調査では、地形図上の基準点を利用し、測量、作図作業をおこなった。遺構の実測図作成には、１／10、１／20、１／40の縮尺を適宜もちいた。

2　調査の経過

調査遺跡が前後することになるが、調査の順にしたがい、北堀前山古墳群の第２次調査、浅見山Ⅰ地区の第２次調査、北堀前山古墳群の第３次調査の順に、調査経過を簡単にしるすことにしたい。

北堀前山古墳群第２次調査

平成12年10月24日、調査員、調査補助員一同現地に集合し、器材の搬入、調査範囲の確定、草刈り、伐採から作業をはじめた。

調査地点は、篠竹、雑木がいちじるしく繁茂しており、実際に表土剥ぎに着手したのは10月26日からであった。10月31日までには、北堀前山２号墳の平面形をほぼとらえきるとともに、北堀前山１号墳に関連する黒褐色土のひろがりを確認することができた。時期の新しい遺構から掘りはじめ、11月７日には北堀前山２号墳の周堀の精査にとりかかり、11月13日には同周堀および北堀前山１号墳関連遺構をほぼ完掘しおえた。この間11月８日には、委託した杭打ちがおこなわれ、以降平面図の作成を鋭意すすめた。11月14日には全景写真の撮影をおこない、以後調査補助員のほとんどを、上記した試掘調査にもどし、小人数で図

面作成作業をつづけた。調査が完全に終了したのは、11月24日であった。実働日数は16日である。

大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区第２次調査

平成13年４月３日より小型重機による表土剥ぎ、遺構の確認作業を開始した。調査地点は丘陵端であり、傾斜がいちじるしく、表土剥ぎや排土の処理に多くの労力を割くこととなった。４月９日に表土を剥ぎおえ、４月10日より確認した周堀の精査をおこなうとともに、等高線図の作成などをはじめ、４月16日には、遺跡全景の写真撮影をおえ、調査を終了した。実働日数は10日である。

北堀前山古墳群第３次調査

上記した浅見山Ⅰ地区の調査と併行して、平成13年４月12日より北堀前山古墳群の第３次調査を開始した。調査地点は、篠竹が鬱蒼と生いしげる新幹線脇の荒撫地であり、まず草刈りから作業をはじめ、南北方向のトレンチに着手したのは、翌13日であった。ひきつづき東西方向のトレンチを開掘し、４月18日には、調査範囲内での北堀前山２号墳の全形をほぼとらええた。４月19日の午前中に、試掘トレンチ全景の写真撮影をおえた。同日の午後には、平面図等ののこりをしあげ、調査を終了した。実働日数は８日である。

Ⅳ　大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区の遺構と遺物

1　層序

調査範囲内の堆積土は、調査範囲が傾斜のいちじるしい丘陵尾根の斜面であったため（第3・4図）、通常台地上でみられる安定した堆積土の状態とは異なるものであった。調査の対象とした層準までの基本的な堆積土は、以下に記す6層に大きくわけることができた。

Ⅰ層：表土層。腐蝕土からなる現地表土（Ⅰa層）下に、黄褐色～暗褐色の山砂のような粘性、しまりのない土（Ⅰb層）が下部を形成する。

Ⅱ層：黒褐色土。古墳の周溝にみられる粘性があり、ややしまった黒褐色土。浅見山Ⅰ地区では、1号遺構の覆土にのみみられる。

Ⅲ層：黄褐色土。いわゆるソフトロームに近い黄褐色ローム。ごく一部平坦面をなす調査範囲の南縁にのみみられる。層厚は、20、30cmである。1号遺構の検出面は、ほぼこの層の上面である。

Ⅳ層：黄褐色土。黄褐色のハードローム。平坦部付近の最も厚い部分での層厚は、60cm前後である。上面がいちじるしく凹凸をなす。

Ⅴ層：明褐灰色土。淡い「小豆色」に近い色調のシルト化したロームである。斜面ゆえかより白みの強いシルト、礫が所々露出し、単一の層としてとらえにくい。

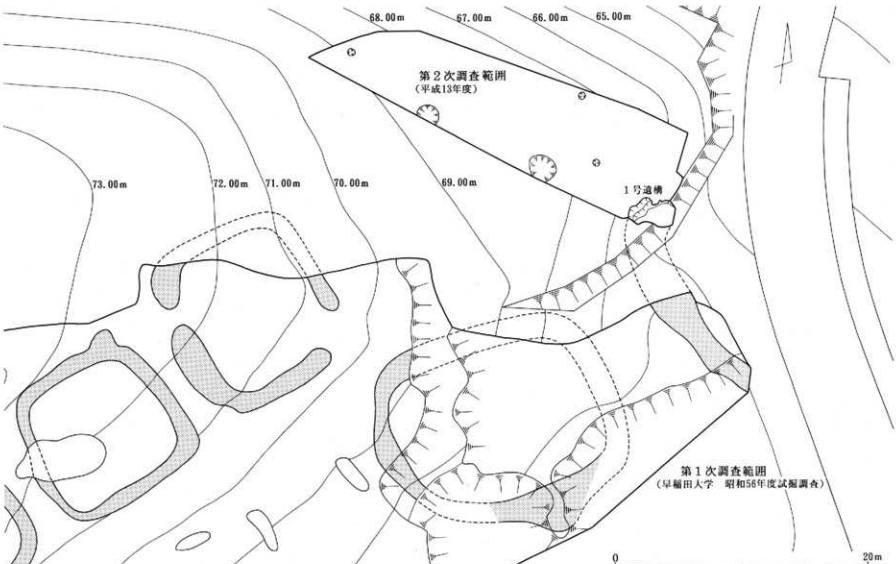
Ⅵ層：礫層。所々シルト質のロームをふくむ礫層。斜面下方では礫層が互層をなす。

2　古墳時代の遺構

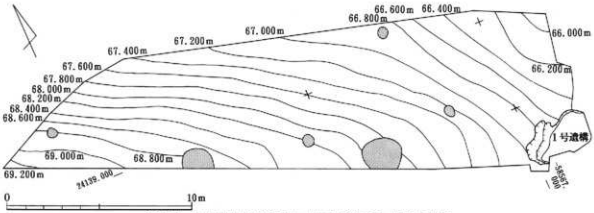
（1）1号遺構

遺構（第3～5図、図版1・2）　1号遺構は、調査範囲の東端で検出した遺構である。調査範囲外の南側に大きな木があったため、周辺は繁茂した根によりいちじるしく攪乱されている。東側は側道により切断されており、調査前にも露頭に黒い落ちこみを確認することができた。確認面は、表土層直下のⅢ層あるいはⅣ層上面である。

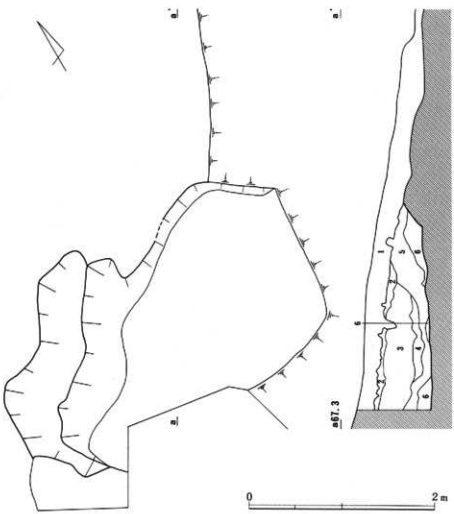
早稲田大学が確認した隅丸長方形に近い形態の方形周溝墓の周溝の一端と考えてよいであろう。平面形はかなり不整な形態であるが、強く彎曲する外壁の形状からみて、北西コーナー部分であろう。東西方向での長さは、3.9mである。西側の壁は凹凸しながらも明瞭に立ちあがるが、南・北側は不明瞭である。最深部での深さは、60cmである。覆土は5層にわけられる。3層は古墳の周溝に通有の粘性のある黒褐色土で、底面近くには所々大きなロームブロックがふくまれる。遺物は一切出土していない。



第３図　大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区丘陵北東部遺構分布図

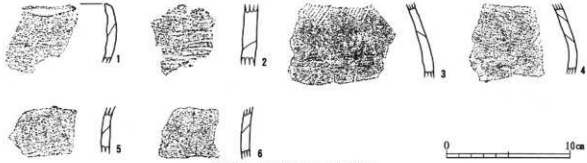


第４図　大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区（第２次）遺構全体図



１号遺構覆土
１層：暗褐色土。粒子が細かく、しまり、粘性のない表土。
２層：黒褐色土。１層と黒褐色土の混合土。
３層：古墳周溝に遺有の黒褐色土。ローム粒をわずかにふくみ、粘性がややある。
４層：黒褐色土。主に、ローム粒、径５mm大のローム小ブロックを所々ふくむ。
５層：黒褐色土。４層に近いが、ローム粒が多い。径５～10mm大のローム小ブロックを所々ふくむ。
６層：暗褐色土。ロームを主に、黒褐色土を不規則にふくむ。

第５図　１号遺構平面図および断面図



第6図　遺構外出土土器実測図

3　遺構外出土遺物

（1）縄文時代以降の遺物

いずれも表土中からではあるが、以下に記す縄文時代以降の土器が出土している。

第6図1は、波状口縁と思われ、口唇部は斜めに面取りされている。外面にはかなり不揃いな横位の擦痕がみられ、内面には粗い調整により粘土が所々盛りあがっている。浅黄橙色を呈し、焼成のよい硬質の土器である。他の個体と胎土がかなり異なるため、一応縄文土器と考えたが、条痕文系の弥生土器の一種である可能性も捨てきれない。

2も縄文土器であろう。外面にはやや間隔をあけて横位の条線あるいは条痕がほどこされている。にぶい橙色を呈し、大小砂粒をかなりふくむ。

3・4は櫛描文の施された胴部破片である。同一個体である。壺の可能性もないではないが、くびれが弱く、くびれ部の径が大きいことからみて、甕と考えた。外面には、横位のナデ調整後、斜めの櫛描直線文が間隔をおき連続して施されている。櫛描文の末端がそろえられており鋸歯文の一種にもみえる。にぶい褐色を呈し、白色粒など砂粒をかなりふくむも、焼成良好である。後期初頭の樽式であろう。

5・6は、甕のくびれ部片である。外面には、縦・斜めのナデ痕、あるいは部分的に細かいハケ痕がみとめられる。5は暗灰黄色、6は橙色を呈し、どちらも細かい白色粒をかなりふくむ。器形、胎土からみて、樽式の類の無文の甕である。

他に微細片ではあるが、弥生土器と思われると内外面赤彩された高坏口縁部片が1点出土している。

Ⅴ　北堀前山古墳群の遺構と遺物

1　層序

基本層序に関しては、浅見山Ⅰ地区と大きく異ならないため、必要な部分のみ補足しておきたい。まず、表土層下のⅠb層に関しては、以下にしるす1号溝とした遺構覆土がⅠb層を主とする土である。また、2号墳、1号墳関連遺構覆土は、Ⅱ層土を主とする土であり、とくに2号墳周溝の北西半では、純層に近い「漆黒」のⅡ層土を確認している。

2　古墳時代の遺構と遺物

今回の調査で検出した遺構は、北堀前山2号墳周溝、北堀前山1号墳関連遺構と呼称した弧状の落ちこみ、および1号溝とした近世以降の溝の3つである（第7～11図）。2号墳に関しては、第3次調査で南東側にのびる周溝および南コーナーを確認しており（第12図）、まとめて以下に記載する。

（1）2号墳

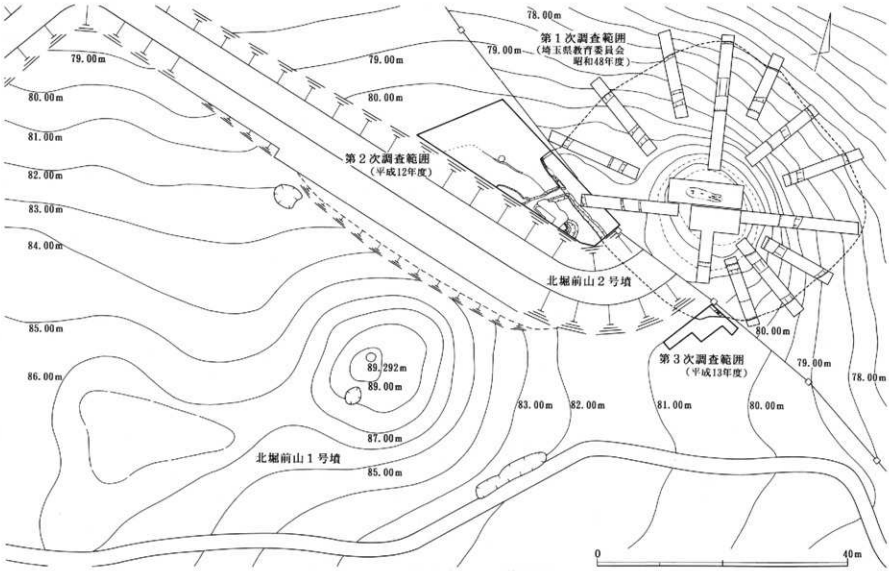
遺構（第7～11図、図版4～6）　第2次調査範囲内の北東半で周溝の一部を検出した。1号溝に切られている。対角線がおおよそ南北の向きとなる方墳の南西辺をなす周溝の一部と思われる。調査範囲内での平面形は長方形で、とくに西コーナーは直角に近く屈曲する。北西－南東方向の長さは16.3m、北西端での幅は2.2m、東端での幅は4.9mである。調査区界の東隅付近では、底面が北に向かってやや高くなることからみて、ほどなくして墳丘側の溝壁となるのであろう。北西側の溝壁は彎曲しつつ立ちあがり、南西側の溝壁は弱い段もちややゆるやかに立ちあがる。溝壁には凹凸がいちじるしい。深さは北西端および西コーナー付近で68cm、東端付近で62cmである。大小の礫がまじりだす「小豆色」の硬いロームであるⅤ層を若干掘りくぼめ溝底としている。移植ごてをはねつけるほど硬いⅤ層を意図的に溝底としたのであろう。溝底は中央付近がややくぼむものの、ほぼ平坦である。

覆土は第10・11図の9～30層である。14～20層は、台地上の古墳時代旧表土に通有の黒褐色～黒色土、24～26・30層は、覆土かどうか判定に迷うロームの多いしまった土である。

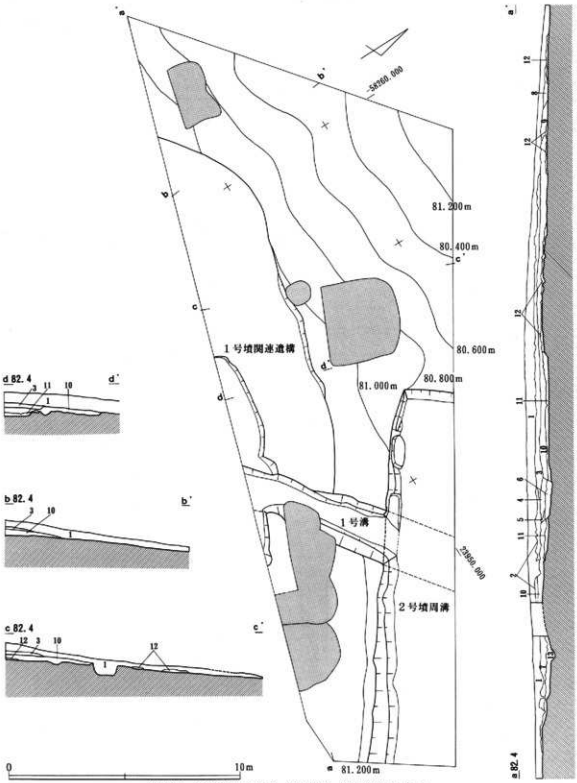
南西壁の北寄りの位置で、溝壁から溝底にかけて掘りこまれた土坑を2基検出した。いわゆる周溝内土坑の一種であろう。北側の土坑1は、長楕円形で、長軸長148cm、短軸長60cmである。坑底は溝底をほんのわずかに掘りくぼめつくられている。土坑2は、1号溝に切られ全形がわからないが、平面形は長楕円形ないしは長方形に近い形態になろう。現存長は156cm、幅62cm前後である。両土坑の覆土は、調査時の所見では、ロームを主とする土である。

第3次調査では、南コーナーの輪郭をとらえるとともに、サブトレンチにより南東壁の立あがりを確認することができた（第12図）。南東壁はいちじるしく凸凹しており、覆土もロームを主とする土が多い。周溝の深さは、64cm前後である。

以上、北堀前山2号墳に関しては、南西周溝の外縁がほぼ直線をなし、西コーナーがほぼ



第７図　北堀前山古墳群（第１～３次）遺構全体図



第８図　北堀前山古墳群（第２次）遺構全体図（１）

北堀前山古墳群（第2次）・土層注記

1層：暗褐色土～灰黄褐色土。下部に軽石粒をふくむ表土層。

2層：暗褐色土。1層土と黒褐色土の不均質な混合土。

3層：褐色土。サラサラした黄褐色土を主に、黒褐色土をふくむ。軽石粒をふくむが、表土のそれより細かい。ややしまっている。

4層：褐色土。3層に近いが、粒子より細かく、硬くしまっている。以下、6層まで1号溝覆土。

5層：褐色土。4層に近いが、黒みがやや強い。6層よりしまりなし。

6層：褐色土。4層に近いが、黒みがやや強い。硬くしまっている。

7層：暗褐色土。粒子の粗い黒みの強い暗褐色土を主に、ロームをふくむ。

8層：暗褐色土。暗褐色土とロームの混合土。

9層：暗褐色土。8層に近いが、ロームが少なく、ややしまっている。

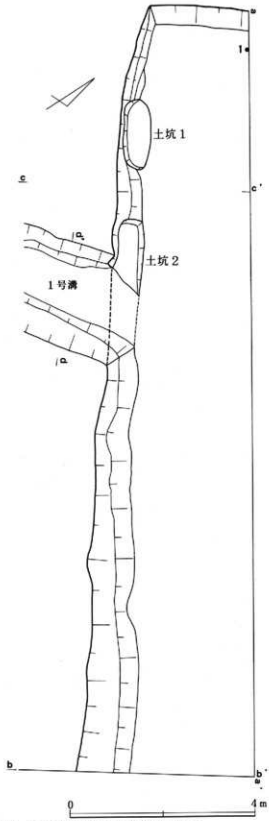
10層：暗褐色土～黒褐色土。粒子の細い暗褐色土～黒褐色土を主に、ローム粒、径1cm大のハードロームのブロックを所々ふくむ。粘性はあまりないが、しまっている。中央に近づくにつれて黒み増す。1号墳関連遺構覆土。

11層：黄色褐色土。黄褐色土のソフトロームを主に、黒褐色土を若干ふくむ。1号墳関連遺構覆土。

12層：黄褐色土。ハードロームのブロック密集。

13層：褐色土。ロームを主に、暗褐色土を若干ふくむ。風倒木痕の覆土の可能性がある。

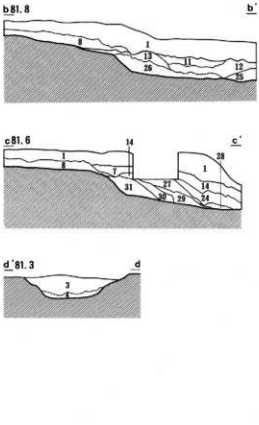
第9図　北堀前山古墳群
（第2次）遺構全体図（2）



第10図　2号墳平面図および断面図（1）

直角に、南コーナーがややひらき屈曲する形態であることがあきらかになった。この結果と第1次調査の成果（小久保・柿沼ほか1978）から、北堀前山2号墳は、やや不整な形態ではあるが、北西－南東の全長が43.7m、北東－南西の全長が38.3mの長方形に近い形態の方墳であると推定される。

遺物（第13図）　第13図1は、北西壁近くの溝底で出土した。1／3前後遺存する小型壺の頸部片である。筒状の頸部に大きくひらく口縁部がつき、胴部が球胴状になる形態であろう。外面にはナデあるいはミガキがほどこされ、部分的に下調整のハケ痕をとどめる。内面には斜め



2号墳覆土
1層：暗褐色土～灰黄褐色土。下部に軽石粒をふくむ表土層。
2層：褐色土。第1次調査のトレンチ埋め土。
3層：褐色土。1層に近いが、粒子が細かい（3～6層は1号溝覆土）。
4層：褐色土。3層に近いが、ローム粒が多く、しまっている。
5層：褐色土。3層に近いが、黒みが強い。
6層：褐色土。3層に近いが、5層よりさらに黒みが強い。
7層：褐色土。1層に近いが、黒みが強い。
8層：褐色土。ローム質で粒子が細かいサラサラした旧表土。
9層：暗褐色土。ロームと黒褐色土の混合土。13層に よく似る。
10層：暗褐色土。9層に近いが、黒褐色土が多い。
11層：暗褐色土。10層に近いが、黒褐色土が若干少ない。
12層：暗褐色土。11層に近いが、黒みやや強く、ローム小ブロックを微量ふくむ。かなりしまっている。
13層：暗褐色土。12層に近いが、しまりが弱い。
14層：黒褐色土。黒褐色土を主に、ローム粒を斑状、雲状にふくむ。
15層：黒褐色土。14層に近いが、黒みが強い。
16層：黒褐色土。14層に近いが、15層よりさらに黒みが強い。
17層：黒褐色土。14層に近いが、16層よりさらに黒みが強い。
18層：黒褐色土。17層に近いが、ロームが若干多い。
19層：黒褐色土。17層に近いが、さらに黒み強く、粘性がある。
20層：黒色土。粘性がきわめて強い黒色土。ローム粒を微量ふくむ。
21層：褐色土。シルト質のロームと黒褐色土の混状に優じる。
22層：黄褐色土。黄褐色ロームの崩落土。黒褐色土を少量斑状にふくむ。
23層：暗褐色土。シルト質のロームを主に、黒褐色土を斑状にふくむ。
24層：暗褐色土。ソフトロームに似たロームを主に、黒褐色土を少量ふくむ。径6～8cm大のロームブロックを局所的にふくむ。
25層：褐色土。ソフトロームに似たロームを主に、黒褐色土を微量ふくむ。下部には鉄分沈着。
26層：暗褐色土。23層に近いが、ロームが多い。
27層：暗褐色土。26層に近いが、黒み、粘性が強い。
28層：暗褐色土。26層に近いが、ロームが多い。
29層：暗褐色土。26層に近いが、ロームが多く、黒みが弱い。
30層：黒褐色土。27層に近いが、ロームが多い。
31層：褐色土。ローム の崩落、流入土。

第11図　2号墳平面図および断面図（2）

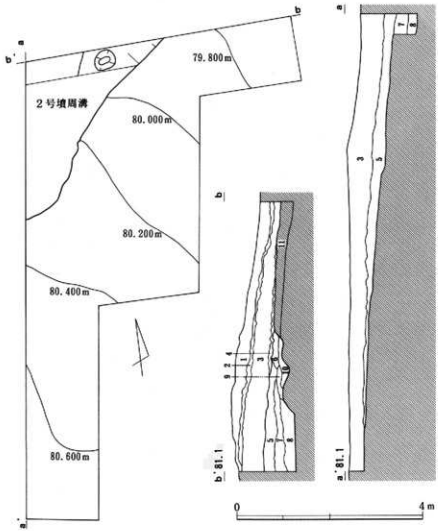
のナデが施されている。橙色を呈し、大小砂粒をふくむ。2も中央付近の溝底直上層出土である。1／3前後遺存する坩の口縁部片で、推定口径は10.1cm前後である。端部が先細りの形態である。内外面ともにナデがほどこされ、所々ハケ痕がみとめられる。浅黄橙色を呈し、大小砂粒をふくむ。焼成良好であるが、やや軟質の土器である。

（2）1号墳関連遺構

遺構（第7・8図、図版7）　調査範囲の南西縁中央の明確な掘りこみに加え、古墳時代遺構覆土やいわゆる旧表土に典型的な黒褐色土が円弧を描き堆積する範囲をふくめ1号墳関連遺構と呼称した。

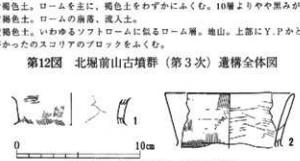
土層断面図で10層とした黒褐色土の分布範囲は、調査区界の南壁沿いで長さ20.4m、中央での幅は4.1mを測る。最も厚い部分での層厚は、15cm前後である。黒褐色土の末端は、少しずつロームをまじえ、層厚を減じとぎれる。分布範囲は、全体に微妙にくぼんでいるかにみえるが、中央付近の縁辺では10cm前後のゆるやかな立ちあがりをしめすことが明瞭に観察できた。黒褐色土は、南壁沿いの南東側にもひろがるが、かなり土層が乱れており、攪乱されていると考えた。

南西壁沿い中央の掘りこみは、長さ9.4m、最大幅が1.3mの弧状の掘りこみである。西側の立上がりは、かなり明瞭であるが、東側ではゆるやかに立ちあがる。掘りこみ部分のみ



北堀前山古墳（第３次）・土層注記
1層：褐色土。褐色土を主とする表土層。
2層：褐色土。上部は暗褐色土が多く、下部にゆくほど褐色の降下軽石が濃集。粒子が粗く、しまりがない。
3層：褐色土。山砂様のサラサラしたロームを主とする層。
4層：褐色土。3層に近いが、より粒子が粗く、黒みが強い。
5層：暗褐色土。暗褐色土を主に、ロームをふくむ。3層より黒み強く、粒子が粗い。粘性、しまりがややある。以下、9層まで2号墳周溝覆土。
6層：褐色土。4層に近いが、ややロームが多く、粘性、しまりも強い。
7層：暗褐色土。5層に近いが、黒褐色土が斑状に混じり、黒みが強い。
8層：暗褐色土。7層に近いが、黒みがやや弱く、粘性が強い。
9層：黄褐色土。ロームを主に、褐色土をわずかにふくむ。10層よりやや黒みが強い。
10層：黄褐色土。ロームの崩落、流入土。
11層：黄褐色土。いわゆるソフトロームに似るローム層。地山。上部にY.Pかと思われる白みがかったのスコリアのブロックをふくむ。

第12図　北堀前山古墳群（第３次）遺構全体図



第13図　２号墳出土土器実測図

の深さは10～15cmである。底面には細かな凹凸がみられるが、全体にほぼ平坦である。覆土はロームを主とし、黒褐色土をわずかにふくむ土である。直接ともなう遺物は一切出土していないが、１号溝との重複部分で後述する高坏脚部片が１点（第14図）出土している。

以上、弧状の掘りこみに関しては、かなり浅い点に問題をのこすが、円弧をなす形態および位置から、１号墳の周溝の外縁の一部である可能性があると考える。

それを取りまく黒褐色土の分布は、まずⅣ層としたハードローム層の上に直接のることから通常の自然堆積とは考えにくい。

周溝にともなう施設や周溝の造作にかかわる痕跡とみることもできるが、ある時点で雨水などにより流出した周溝覆土の一部が何らかの形で残存したと考える方が無理が少ないように思われる。

3　その他の遺構と遺物

（1）1号溝

遺構（第8～11図、図版7）　調査範囲の東寄り中央を斜めに横切る溝である。2号墳周溝、1号墳関連遺構を切ってつくられている。長さは9.7m、幅1.7～2.2m、深さは48～56㎝である。覆土からみて、近世以降の遺構である。

遺物（第14図）　南西壁寄りの1号墳関連遺構との重複部分で高坏脚部片1点を検出した。傾斜の強い斜面であることからすれば、1号墳に関連する遺物である可能性もある。第14図は、1／8前後遺存する高坏脚部小破片より推定復元した。裾部がゆるやかにひらく形態で、推定脚端径は11.6㎝である。かなり磨耗しているが、内外面ともに横位のナデがほどこされているようである。にぶい橙色を呈し、細かな砂粒をふくむ精良な胎土である。焼成良好である。古墳時代前期の精製的な高坏であろう。

第14図　1号溝出土土器実測図

Ⅵ　まとめ

今回の調査はいずれもわずかな範囲の調査であったが、古墳時代の墓域の一角を調査するという共通点によって結ばれる結果となった。この結果は偶然ではない。眼下に沖積地をはさみ同時代の集落址を見下ろす丘陵尾根の先端付近という調査地点の地形的類似ゆえである。古墳時代前期、あるいは古墳時代前期から中期にかけての、直線距離にして400m前後の２つの墓域とはいえ、また違いもないわけではない。墳丘の問題はひとまずおくとして、ひとつは、規模の問題である。すでに指摘されているように、群集形態の違いも問題になるであろう。

様々な問題にふれる余裕はないため、ここでは、調査所見から派生する問題点についてのみ簡単にまとめておくことにしたい。

大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区に関しては、方形周溝墓の一隅を調査したのみであり、今回の調査の成果はごくかぎられたものであった。早稲田大学の調査成果を借りるなら、列状の構成をなす方形周溝墓群の北東端の１基、一辺が17mをこえる方形周溝墓の南西周溝の北端部分と考えてよいであろう。大型の方形周溝墓である。遺構にともなう遺物はないが、調査範囲全体としては弥生時代後期初頭、後期末～古墳時代初頭の土器が出土している。

大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区というと、ともすれば弥生時代中期の再葬墓とされる土坑が注目されてきた傾きがあるが（本庄市史編集室編　1986ほか）、弥生時代後期以降についても重要であることを再確認しておきたい。

北堀前山古墳群に関しては、まず今回の調査により、２号墳がやや不整な形態ながら長方形に近い方墳となることが推定された。

古墳時代前期の方墳としては、川越市三変神社古墳（増田・坂本ほか　1986）が著名であるが、多少時間幅をとるなら、周辺地域においても、岡部町千光寺５号墳（増田ほか　1975）、美里町安光寺２号墳（増田ほか　1981）など方形、円形にわかに判じがたい形態の古墳がみられ、地域をひろげるなら前方後方墳やいわゆる前方後方形周溝墓、方形周溝墓から構成される該期の複雑な墓域の様相があきらかになるとともに、また、前方後方墳に近接する方墳の存在が指摘されるなど（坂本　1990）、方墳の出現時期のみならず系統の問題も再検討が必要な段階にさしかかっているといえよう。

２号墳の場合、長辺方向での全長が44m弱と、方形周溝墓とは隔絶した規模を有する。丘陵尾根縁辺の斜面を利用し、周溝底をほぼⅤ層とした硬質の暗色ロームまで掘りそろえ、傾斜をそのままに墳丘を高く盛りあげ構築している。眼下の低地部からの眺望性を強く意識し、斜面を最大限に利用し少ない労力で、大きさを視覚的に誇示する構築法といえる。

今回の調査では、いわゆる周溝内土坑を２基検出している。周溝内土坑は、方形周溝墓にともなう例が多いように見うけられる。

出土遺物は、土器小破片が２点出土したにすぎない。そもそも供献土器の乏しい古墳なのであろう。ただし、内１点の壺は、小型の二重口縁の壺と思われ、これまでの推定（小久保・柿沼　1978）とは異なり、おそらく底部穿孔された二重口縁壺の墳丘への供献が、２号墳においてもなされたことを推測させる材料である。このことは、２号墳の時期ともかかわり、出土土器の再検討をうながす。現時点では、出土土器の明確な位置づけをおこなうこと

ができないが、列点のほどこされた坩の問題をもふくめ今後の課題としたい。

1号墳関連遺構とした遺構については、1号墳の周溝外縁である可能性を指摘するにとどまる。時期が大きく下る遺構である1号溝より出土した高坏脚部片が、1号墳関連遺構に、あるいは1号墳そのものと関連する遺物であるとすれば、間接的ながら1号墳の時期を探る手がかりのひとつをえたことになる。

1号墳と2号墳の関係については、現状では全く不明であるとせざるをえないが、1・2号墳がともに実際の丘陵尾根の先端ではなく、やや奥まった位置にあることに注意をうながしておきたい。1・2号墳が位置する尾根筋は、平場をなしつつさらに曲折し北へとのび、北堀前山遺跡、宥勝寺北裏埴輪窯跡のある先端へと連なる。尾根先端の一帯に関しては、一昨年より本庄市教育委員会が継続して試掘調査をつづけており、遠からず成果の一端を報告することになるであろう。

大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区に関しては、弥生時代後期以降の周辺域での墓制の変化の問題、とくに古墳時代前期の方形周溝墓の様相、方墳の出現過程、両者の異同の問題、北堀前山古墳群に関しては、第1次調査の結果をもふくめた墳丘構造、埋葬施設、出土遺物の再検討、これは大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区の場合と同じであるが、周辺の同時期の墳墓との比較、あるいは墓域と集落の関係の問題など、積みのこした課題は多い。今後あらためて議論を深めるべく検討することを約し、ひとまずまとめとしたい。

末筆ながら、発掘調査、報告書の作成にあたりご協力、ご教示を賜った様々な方々に心から御礼申し上げる次第である。

引用文献および主要参考文献

浅野一郎　1999　『大久保山Ⅴ』早稲田大学本庄校地文化財調査報告５、早稲田大学本庄校地文化財調査室

飯島克巳・若狭　徹　1988　「樽式土器編年の再構成」『信濃』第40巻第９号、信濃史学会

岩瀬　譲　1998　『地神／塔頭』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第193集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団

岩田明広　1998　『今井条里遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第192集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団

太田博之・佐藤好司　1991　『本庄遺跡群発掘調査報告書Ⅴ－公卿塚古墳－』、本庄市埋蔵文化財調査報告第19集、本庄市教育委員会

小澤正人　1996　『大久保山Ⅳ』早稲田大学本庄校地文化財調査報告４、早稲田大学本庄校地文化財調査室

柿沼幹夫　1996　「北関東①　埼玉県」『関東の方形周溝墓』同成社

金子彰男　2000　「埼玉県における弥生後期の土器編年について」『第９回東日本埋蔵文化財研究会－東日本弥生時代後期の土器編年－』東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会

恋河内昭彦　1987　『真鏡寺後遺跡Ⅰ』児玉町文化財調査報告書第14集、児玉町教育委員会

――――　1990a　『塩谷下大塚遺跡』児玉町文化財調査報告書第11集、児玉町教育委員会

――――　1990b　『根田遺跡』児玉町文化財調査報告書第12集、児玉町教育委員会

――――　1990c　『雷電下遺跡－Ｂ・Ｃ地点－』児玉町文化財調査報告書第13集、児玉町教育委員会

――――　1991　『真鏡寺後遺跡Ⅲ』児玉町文化財調査報告書第14集、児玉町教育委員会

――――　2002　「児玉地方の弥生土器」埼玉土器観会第20回資料、埼玉土器観会

小久保　徹・柿沼幹夫ほか　1978　「東谷・前山・古川端」埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集、埼玉県教育委員会

昆　彰生　2001　『大久保山Ⅸ』早稲田大学本庄校地文化財調査報告９、早稲田大学本庄考古資料館

坂本和俊　1990　「東京・埼玉・神奈川」『古墳時代の研究　第11巻　地域の古墳Ⅱ　東日本』、雄山閣

――――・柿沼幹夫・利根川章彦ほか　1986　『埼玉県児玉郡神川村前組羽根倉遺跡発掘調査報告書』前組遺跡発掘調査団

笹森健一　1983　『埋蔵文化財の調査Ⅴ－権現山遺跡の調査－』、上福岡市教育委員会

佐藤明人ほか　1988　『新保遺跡Ⅱ』群馬県埋蔵文化財調査事業団

佐藤好司・増田一裕　1989　『諏訪遺跡（Ｂ地点）、久城前遺跡（Ｂ地点）発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第15集、本庄市教育委員会

菅谷浩之　1984　『北武蔵における古式古墳の成立』児玉町史料調査報告古代第１集、児玉町教育委員会

――――・駒宮史朗ほか　1973　『枇杷橋遺跡発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告第20集、埼玉県遺跡調査会

――――ほか　1984　『長沖古墳群』児玉町文化財調査報告書第１集、児玉町教育委員会

立石盛詞ほか　1982・1983　『後張－本文編・図版編Ⅰ・Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第15・26集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団

長滝歳康　1991　『白石古墳群・羽黒山古墳群』美里町発掘調査報告書第７集、美里町教育委員会

橋本博文・金子正之ほか　1980　『宥勝寺北裏遺跡』宥勝寺北裏遺跡調査会

長谷川　勇・石橋桂一ほか　1985　『夏目遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第５集２分冊、本庄市教育委員会

――――・――――　1987　『社具路遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第５集３分冊、本庄市教育委員会
坂野和信　1988　「和泉式期土器の様相－竈導入期の土器群－」『本庄市立歴史民俗資料館紀要』第２号、本庄市立歴史民俗資料館
深澤敦仁　1998　「上野における土器の交流と画期」『庄内式土器研究』Ⅻ、庄内式土器研究会
細田　勝・富田和夫ほか　1984　『向田・権現塚・村後』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第38集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
本庄市史編集室編　1976　『本庄市史　資料編』本庄市
――――――――　1986　『本庄市史　通史編Ⅰ』本庄市
――――――――　1989　『本庄市史　通史編Ⅱ』本庄市
増田逸朗・小久保　徹ほか　1977　『塚本山古墳群』埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集、埼玉県教育委員会
――――・――――・柿沼幹夫ほか　1979　『下田・諏訪』、埼玉県埋蔵文化財発掘調査報告書第21集、埼玉県教育委員会
――――・駒宮史朗ほか　1979　『雷電下・飯玉東』埼玉県遺跡発掘調査報告書第22集、埼玉県教育委員会
――――・坂本和俊ほか　1986　『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県県民部県史編さん室
――――ほか　1975　『千光寺』埼玉県遺跡調査会報告第27集、埼玉県遺跡調査会
――――ほか　1981　『清水谷・安光寺・北坂』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第１集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
増田一裕　1985　『本庄遺跡群発掘調査報告書－久下東遺跡・遺構編－』本庄市埋蔵文化財調査報告第７集、本庄市教育委員会
――――　1987　『東富田遺跡群発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第10集、本庄市教育委員会
――――　1989　『四方田・後張遺跡群発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第14集、本庄市教育委員会
――――　1990a　『諏訪・久城前・久城往来北遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第17集、本庄市教育委員会
――――　1990b　『山根遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第18集、本庄市教育委員会
――――　1992　『今井諏訪遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第21集、本庄市教育委員会
――――・太田博之・松本　完　2001　『本庄市域における古式古墳の調査成果と課題』群馬古墳文化研究会・南毛古墳文化研究会第５回合同検討会資料、南毛古墳文化研究会
吉見町史編纂室編　1996　『吉見町史　通史編１』吉見町
若狭　徹　1990　「群馬県における弥生土器の崩壊過程」『群馬考古学手帳』Vol.１、群馬土器観会

図　版

大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区近景（南東より）

1号遺構土層断面（1）（調査区界南東露頭、東より）

大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区
全景（西より）

図版 2

1号遺構（東より）

1号遺構土層断面（2）（東より）

1号遺構土層断面（3）（西より）

北堀前山古墳群遠景
(北東より)

第2次調査範囲全景 (1)
(北西より)

第2次調査範囲全景 (2)
(北西より)

図版 4

2 号墳周溝（1）
（北西より）

2 号墳周溝（2）（北西より）

2号墳周溝（3）（南東より）

2号墳周溝（4）（南東より）

2号墳周溝南西コーナー（南東より）

図版 6

2号墳周溝内土坑1（北東より）

2号墳周溝内土坑2（北東より）

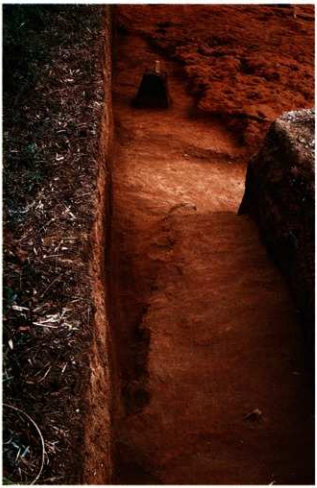
北東壁土層断面（1）（a－a′、南西より）

北東壁土層断面（2）（a－a′、南西より）

南東壁土層断面（b－b′、北西より）

1 号墳関連遺構（1）（北西より）

1 号墳関連遺構（2）（北西より）



1 号墳関連遺構（3）（東より）

図版 8

第３次調査範囲全景（1）（東より）

第３次調査範囲全景（2）（南より）

２号墳周溝確認状況（南より）

報告書抄録

ふ り が な	おおくぼやまいせきあざみやまいちく（だいにじ）・きたぼりまえやまこみんぐん（だいに・さんじ）はっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区（第２次）・北堀前古墳群（第２・３次）発掘調査報告書
副 書 名	新幹線本庄新駅（仮称）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査Ⅰ
シ リ ー ズ	本庄遺跡調査会報告第６集
執筆・編集者	松本　完・町田　奈緒子
編 集 機 関	本庄市遺跡調査会
所　在　地	〒367-8501　埼玉県本庄市本庄３-５-３本庄市役所内　TEL 0495-25-1186
発 行 年 月 日	2002（平成14）年３月29日

所収遺跡名所	所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
大久保山遺跡 浅見山Ⅰ地区	埼玉県本庄市大字東富田字山根88	112119	53-114	36° 10′ 57″	139° 10′ 55″	2000.04.03 2000.04.23	198	道路の拡張工事

所収遺跡名所	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大久保山遺跡 浅見山Ⅰ地区	墳墓	古墳時代	方形周溝墓の周溝	弥生土器、土師器	方形周墓の周溝の一部を確認
	散布地	縄文		縄文土器	

所収遺跡名所	所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
北堀前山古墳群	埼玉県本庄市大字北堀字前山 2081-1	112119	53-186	36° 12′ 51″	139° 11′ 08″	2000.10.23 2000.11.24 2001.04.11 2001.04.19	295	鉄道新駅建設関連工事

所収遺跡名所	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北堀前山古墳群	古墳群	古墳時代	古墳周溝	土師器	北堀前山２号墳の周溝の一部を調査
	散布地	縄文		縄文土器	

本庄市遺跡調査会報告　第６集

大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区（第２次）・
北堀前山古墳群（第２・３次）発掘調査報告書
－新幹線新駅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査Ⅰ－

平成14年３月25日　印刷
平成14年３月29日　発行

発行　本庄市遺跡調査会
埼玉県本庄市本庄 3-5-3
印刷　たつみ印刷株式会社
埼玉県深谷市東大沼356番地